

県立高等学校入学者選抜調査改善委員会
最終とりまとめ（案）

県立高等学校入学者選抜調査改善委員会

はじめに

平成28年度及び平成27年度神奈川県公立高等学校入学者選抜（以下「入学者選抜」という。）にかかる学力検査において、採点誤りがあったことが、全県立高校による再点検の結果により判明しました。平成28年3月18日までに、採点誤りは、学力検査を実施した学校のうち、2か年であわせて8割近い学校で見つかり、誤りのあった受検者数は、平成28年度に330名、平成27年度に188名にものぼっています。また、この採点誤りの結果、2か年で4名の受検者が本来合格であったにもかかわらず、不合格とされていたことも明らかになっています。

こうした再点検の結果を受け、「県立高等学校入学者選抜調査改善委員会」（以下「本委員会」という。）は、採点誤りの原因を究明し、その上で、実効性のある再発防止・改善策及び事後の検証方法等を取りまとめるため、外部有識者3名と中学・高校の校長4名、PTA代表2名、県教育委員会職員1名の計10名で設置されました。

本委員会は、平成28年3月29日に第1回を開催して以降、同年5月30日までの間に、全5回の委員会を開催し、議論を重ねました。その間、客観的な視点で幅広く、採点誤りの発生原因等について調査・協議し、共通理解を図ってきました。また、事務局を通して、各学校に聞き取りを行い、実態を把握するなど、再発防止・改善策を検討する上で必要な情報収集も行ってきました。

本報告書では、まず、これまでに行ってきた調査の結果や学校からの聞き取りから、採点誤りの発生状況や内容を分析し、そこから見えてきた採点誤りの原因を示しました。次に、調査・分析結果を踏まえ、具体的な再発防止・改善策を示し、最後に、入学者選抜実施後の検証方法等を提言しています。

提言は、再発防止・改善に向けて、記号選択式問題における解答方法としてマークシート方式を導入すべきであるとし、あわせて、今考え得る効果的な方策を、具体的かつ幅広く示しています。

本委員会としては、神奈川県教育委員会が、この提言を踏まえ、再発防止・改善策を一刻も早く策定した上で、着実に実行し、さらに入学者選抜実施後の検証においても、採点誤りがなかったことを明らかにすることで、大きく損なわれた県民の信頼を取り戻すことを望んでいます。

目次

I	県立高等学校入学者選抜調査改善委員会の取組み	1
1	入学者選抜における採点誤り判明以降の経過及び再点検の結果	1
(1)	採点誤り判明以降の経過	
(2)	再点検の結果について	
2	調査改善委員会の設置	3
3	調査改善委員会での検討経過	3
II	採点誤りの原因・課題分析	5
1	採点・点検方法	5
2	採点環境（日数・採点時間、作業スペース、休憩時間）	7
3	作問・出題形式、解答用紙	8
4	採点・点検体制	8
5	管理体制・規範意識	8
III	再発防止・改善策	9
1	採点・点検方法	10
(1)	記述式問題の採点・点検方法	
(2)	その他検討すべき採点・点検方法	
2	採点・点検に専念できる環境の確保	11
3	作問・出題形式、解答用紙の工夫・改善	12
4	採点・点検に対する意識の向上、規範意識の向上	12
IV	入学者選抜実施後の検証方法等	14

【参考資料】

- 1 県立高等学校入学者選抜調査改善委員会の設置及び運営に関する要綱
- 2 県立高等学校入学者選抜調査改善委員会 委員名簿
- 3 県立高等学校入学者選抜調査改善委員会 審議経過
- 4 委員会における調査結果
- 5 第1回～第5回までの議事要旨

I 県立高等学校入学者選抜調査改善委員会の取組み

1 入学者選抜における採点誤り判明以降の経過及び再点検の結果

入学者選抜における採点誤りが判明してからの経過及び再点検の結果は、次のとおりである。

(1) 採点誤り判明以降の経過

- 平成28年3月4日 県立高等学校の受検者から平成28年度入学者選抜における答案用紙の自己情報開示請求
- 3月7日 当該校が開示にあたり答案用紙を点検したところ、小計点及び合計点に誤りがあることが判明
- 3月8日 県教育委員会から、学力検査を実施した全県立高等学校に、全受検者の全教科について小計点及び合計点を点検するよう指示し、各学校が一斉に再点検を実施
- 3月10日 点検途上で、複数の学校で誤りがあることが明らかになり、県教育委員会から、小計点及び合計点以外の採点についても点検するよう指示し、各学校が一斉に再点検を実施
- 3月11日 平成28年度入学者選抜に係る小計点及び合計点の採点誤りについて公表。さらに、県教育委員会から、昨年度実施した平成27年度入学者選抜についても点検するよう指示し、各学校が一斉に再点検を実施
- 3月17日 平成28年度入学者選抜に係る小計点及び合計点以外の採点誤りについて公表
- 3月22日 平成27年度入学選抜に係る再点検結果について公表

(2) 再点検の結果について

ア 平成28年度入学者選抜に係る採点の再点検の結果

全県立高校 143 校中、学力検査を実施した 139 校、157 課程

再点検の内容	誤りのあった 学校数・課程数	誤りのあった 受検者数	本来合格と すべき受検者数 (※3)
小計点及び 合計点	57校・57課程	107名	1名
小計・合計 以外の採点	66校・67課程	224名	1名
合 計	88校・89課程 (※1)	330名 (※2)	2名

※1 誤りのあった学校数・課程数は、重複している学校が 35 校、35 課程があるため合計は異なる。

※2 誤りのあった受検者数には、重複して誤りのあった生徒が 1 名いるため、合計は異なる。

※3 採点誤りにより、本来不合格であった受検者を合格としていたため、本来合格とすべき受検者を不合格としていた人数（その他の受検者については、採点誤りの結果が合否の判定を覆すまでには至らなかった。）

イ 平成27年度入学者選抜に係る採点の再点検の結果

全県立高校 143 校中、学力検査を実施した 139 校、157 課程

再点検の内容	誤りのあった 学校数・課程数	誤りのあった 受検者数	本来合格と すべき受検者数 (※2)
小計点及び 合計点	50校・52課程	79名	1名
小計・合計 以外の採点	47校・48課程	109名	1名
合 計	71校・75課程 (※1)	188名	2名

※1 誤りのあった学校数・課程数は、重複している学校が 26 校、25 課程があるため合計は異なる。

※2 採点誤りにより、合格とすべき受検者を不合格としていた人数（その他の受検者については、採点誤りの結果が合否の判定を覆すまでには至らなかった。）

ウ 答案用紙の誤廃棄

平成 27 年度入学者選抜に係る採点の再点検を指示したところ、「神奈川県教育委員会行政文書管理規則」において、本来、1年間保存すべき答案用紙を、保存期間経過前に廃棄してしまった高校が3校あることが判明した。

誤廃棄の あった学校名	経 緯
白山高等学校	平成28年1月7日、保管していた平成27年度の答案用紙等を搬出し、シュレッダー処理してしまった。途中で誤りに気づき、処理を中止したが、国語の答案用紙374枚中171枚を誤廃棄してしまった。
港北高等学校	平成28年1月20日、保管していた平成27年度の答案用紙等を搬出し、シュレッダー処理してしまった。
相模原総合 高等学校	平成28年3月7日、保管していた平成27年度の答案用紙等を搬出し、シュレッダー処理してしまった。

2 調査改善委員会の設置

平成 28 年度及び平成 27 年度の神奈川県立高等学校入学者選抜の採点において、再点検の結果、多くの誤りがあったことが明らかとなった。

そこで、神奈川県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）は、入学者選抜の根幹を揺るがす事態と重く受け止め、一刻も早く採点誤りの原因を調査・究明し、具体的な再発防止・改善策及び入学者選抜実施後の検証方法等について、協議・検討を行う必要があると判断し、平成 28 年 3 月末に本委員会を設置した。

そして、県教育委員会から本委員会に対して、平成 29 年度入学者選抜に反映させるため、5 月末を目途に再発防止・改善策等を取りまとめるよう依頼があり、全 5 回にわたる委員会を通じて、議論を重ねることとした。

3 調査改善委員会での検討経過

本委員会は、平成 28 年 3 月 29 日に第 1 回を開催し、5 月までに 5 回にわたる協議を行った。本委員会では、まず、採点誤りの原因究明に向けた調査内容、再発防止・改善策の策定に向けた今後の検討内容を確認した。

そして、様々な調査結果から考えられる原因について協議し、その原因から考えられる再発防止・改善策について考察した。また、あわせて、再発防止策が正しく機能しているかどうかを検証する方法についても協議し

てきた。

こうした協議結果を「中間とりまとめ」として整理し、さらに協議を重ね、「最終とりまとめ」とした。なお、これまでの調査結果等の資料を巻末に掲載している。

Ⅱ 採点誤りの原因・課題分析

今回、多くの採点誤りが判明したため、本委員会は県教育委員会に対して、実際の採点・点検方法や具体的な採点誤りの内容、また、採点日数や受検者数と採点誤りに関する相関関係等について、調査を依頼した。

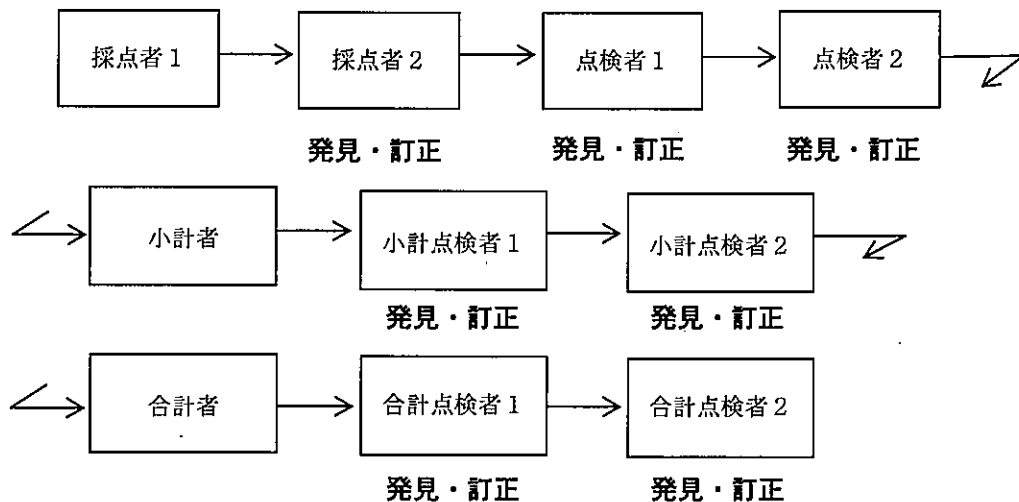
また、学校からの聞き取り内容もあわせて報告を求め、本委員会で調査結果を協議、分析したところ、様々な原因が重なり合って採点誤りが起こっており、一つの調査結果から単純に一つの原因が特定できるものではないことがわかった。

そこで、本委員会では、その原因を採点・点検方法をはじめとする5つの項目に整理した。

1 採点・点検方法

神奈川県における現行の採点・点検方法は、次の図に示す通り、採点者1、採点者2による採点作業後、点検者1、点検者2による2回の点検作業を実施。その後、小計の採点、小計点検者1、小計点検者2による2回の点検作業、続いて、合計の採点、合計点検者1、合計点検者2による2回の点検作業を行うこととしている。

(本県における現行の採点・点検方法)

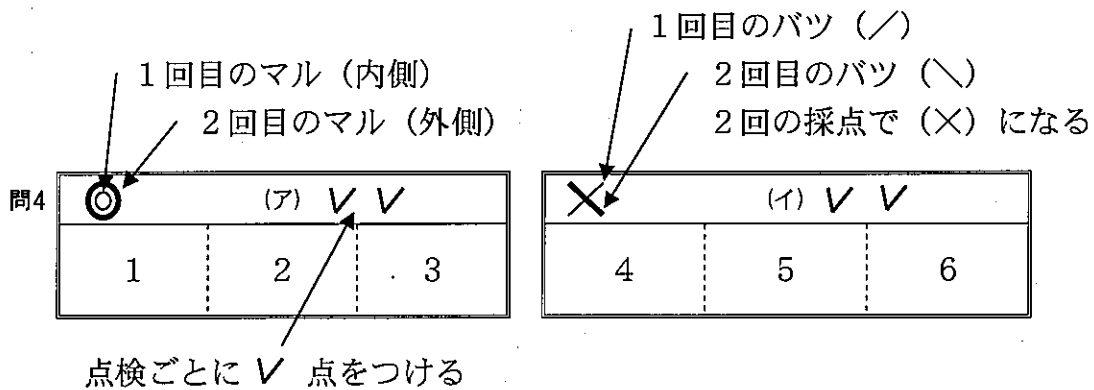


こうした採点・点検方法をとる中で、原因として考えられるものを、次のとおり整理した。

- 最初に採点したものに誤りはない、ましてや、単純な記号選択式問題において誤りはない、という思い込みがあり、採点結果をそのまま追認してしまって、点検が機能していなかった。

- 特に、2人目の点検者については、自分の前に点検が行われているのだから誤りはない、という思い込みがあり、前の採点・点検結果に引きずられてしまって、前述と同様、点検が機能していなかった。
- 採点・点検は、採点者・点検者一人ひとりが受検者の答案と正答表を見比べて行っている。記号選択式問題については、逐一正答を確認することなく、記憶に頼って採点していた実態もあった。こうした採点方法をとったことが採点誤りの原因の一つとなっている。

※ 神奈川県における採点・点検方法は、県が示している基本マニュアルによれば次のとおり。



1 採点、点検におけるマル (○)、バツ (✓)、サンカク (△) 及び V 点の付け方について

- (1) 1回目の採点は、小さいマル (○) 又は右上から左下へのバツ (✓) のみを付け、2回目の採点では、大きいマル (○) 又は左上から右下へのバツ (✗) を付け、2回で採点を完成させる。〔バツは2回目の採点で (×) という印になる。〕
- (2) 「正答表並びに採点基準」の「採点上の注意」に従って中間点を与える場合には、1回目の採点で小さいサンカク (△) を付け (サンカク (△) の内側に中間点の点数を記入する。)、2回目の採点で大きいサンカク (△) を付け、2回で採点を完成させる。

(略)

- (5) 点検の際は、1回ごとに、V 点を付ける。点検は担当者を替えて2回以上行う。
- (6) 採点・点検の際は、解答欄の受検者の解答に、マル (○)、バツ (✓)、サンカク (△) 及び V 点などが極力かからないよう留意する。

- 前記のように、マニュアルどおりに点検済みの印であるレ点を付けても、それを斜線と見誤って正答を誤答としてしまうことや、点検結果をすべてレ点で表示することから、それが惰性的な作業になりがちになるなど、マニュアルの中にも、採点誤りを引き起こす原因につながっているものがある。
- 受検生の解答は様々であり、各学校は、県教育委員会が正答例とあわせて示している「採点上の注意（採点基準）」に照らして校内で取扱いを整理しているが、それを徹底できない、あるいは共有されなかったことが、採点誤りの原因の一つとなっている。

2 採点環境（日数・採点時間、作業スペース、休憩時間）

入学者選抜に係る日程では、学力検査日から合格発表までの期間が中8日（土、日を除く）あり、この期間中に在校生を登校させず全職員で行う採点日を1日確保し、さらに学校の判断で1日追加できるようにしている。また、休憩時間は計画的かつ一斉にとるようマニュアルに記載されている。

こうした採点環境の中で、原因・課題として考えられるものを次のとおり整理した。

- 合格発表までに一定の期間があるとはいえ、教科によって採点時間にばらつきがあり、時間的なプレッシャーがかかって焦りが出たり、計画通りに休憩時間が取れなかった、あるいは集中力が維持できなかったことが誤りの原因の一つとなっている。
- 採点・点検の時期は、大学受験や進級に関わる生徒への対応など、他の業務が並行して行われている実態があり、合格発表までのスケジュール管理が綿密とは言えなかった可能性がある。業務分担を明確にしておかないと、誤りを誘発する原因となる。
- 採点日を臨時休校（生徒を登校禁止）とするなど、採点環境の整備に配慮がなされているとはいえ、一ヶ所の会場で全教科が採点すると、他の教科の採点・協議の声や進捗状況が気になり、集中できないことなどが誤りの原因の一つとなっている。
- 特に受検者数の多い学校のスケジュールに合わせて日程を組む必要がある。

3 作問・出題形式、解答用紙

作問や出題形式、解答用紙に原因があったと考えられるものとして、次のとおり整理した。

- 学力検査の出題形式（記述式）や配点の方法が、採点誤りの原因の一つとなっている。
- 解答用紙に直接採点する方式にも関わらず、生徒が書いた答えに○や×などの印がかからないよう採点するため、こうした印を各解答欄上部の狭いスペースに記入しなければならず、採点を意識した解答用紙のレイアウトになっていないことが採点誤りの原因の一つとなっている。（6ページ図参照）

4 採点・点検体制

採点誤りに関わった採点・点検者の担当教科や職における調査結果などから考えられる課題を、次のとおり整理した。

- 特定教科の教員、あるいは、特定の職に偏って採点誤りがあったということではないことから、誰にでも起こりうる可能性があるという前提に立って、各教員個人の問題ではなく、学校の採点・点検体制全体の問題として捉え、改善策を打ち出す必要がある。
- 特に、合否の判定の分岐点に関わる採点・点検体制を強化させるとともに、責任の所在を明確にしておく必要がある。

5 管理体制・規範意識

答案用紙の誤廃棄について、その理由が、保存期間を認識していながら誤って廃棄してしまった、あるいは保存期間経過前と認識していながら廃棄してしまったというものであり、考えられる原因として次のとおり整理した。

- 学校全体の文書管理体制が不十分であった。
- 神奈川県教育委員会行政文書管理規則の規定に則って、本来1年間保存すべき文書を、保存期間経過前に廃棄してしまったということから、規範意識が低かった。

Ⅲ 再発防止・改善策

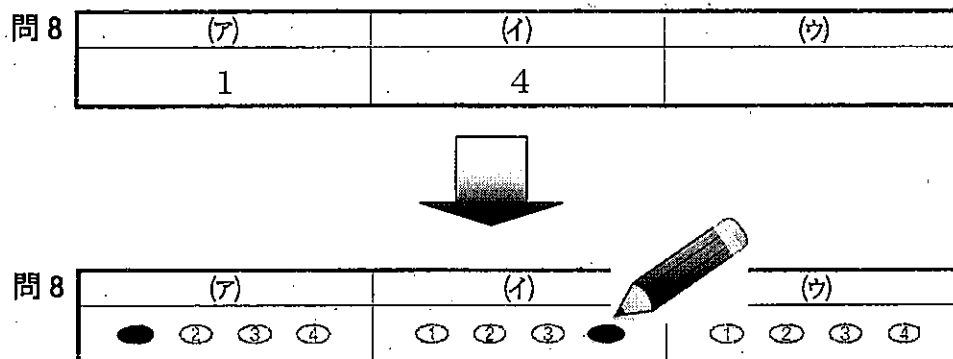
神奈川県は、これまでも平成 12 年度入学者選抜において採点誤りを起こし、それ以来、再発防止に取り組んできたにもかかわらず、再び採点誤りが発生していることから、思い切った再発防止・改善策を打ち出す必要がある。

一方で、平成 25 年度の入学者選抜制度の改善の際に、出題にあたっては、思考力・判断力・表現力を問うことも求められ、表現力を測る手立てとして記述式問題が導入されたとのことであり、本委員会においてもその必要性については十分認識している。また、出題方法を大きく変えることは、現在の中学校 3 年生に過度な負担を強いることになりかねないと考えており、そうした中で採点誤りをゼロにする方策が求められる。

そこで、本委員会は、採点方法における、記号選択式問題の解答方法として、マークシート方式を導入することを提言する。その上で、導入に併せて必要な事項を整理して提言する。

記号選択式問題における解答方法としてマークシート方式の導入

採点・点検にあたってヒューマンエラーを防止し、記述式問題の採点に専念する時間を確保する観点から、記号選択式問題の解答方式について、マークシート方式を導入すべきである。



※ 配慮が必要な生徒への対応

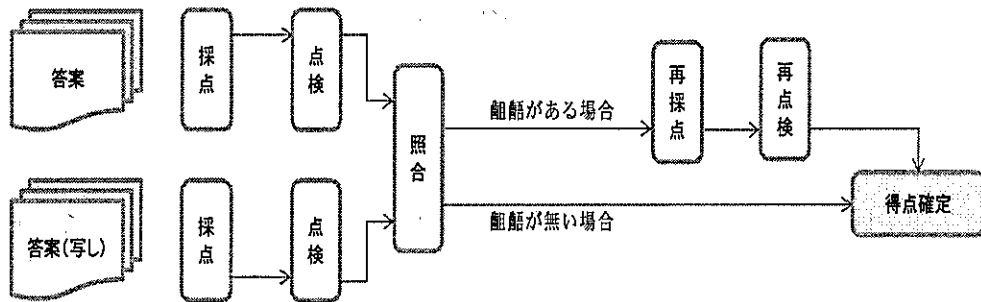
現在も、外国につながるのある受検生や、障害等のある受検生など、配慮が必要な受検者に対しては、ルビ付問題や拡大版問題などによる対応を行っている。マークシート方式を導入した場合においても、受検者に不利益が生じないように、十分な配慮が必要である。

1 採点・点検方法

ヒューマンエラーを防止し、採点・点検を十分に機能させるため、次のとおり提言する。

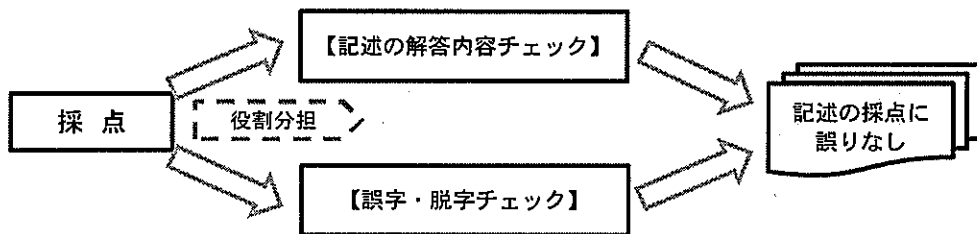
(1) 記述式問題の採点・点検方法

ア 記述式問題については、2系統で採点後、突き合わせて齟齬がないかを確認し、齟齬があれば、再度採点・点検を行う方法を導入すべきである。



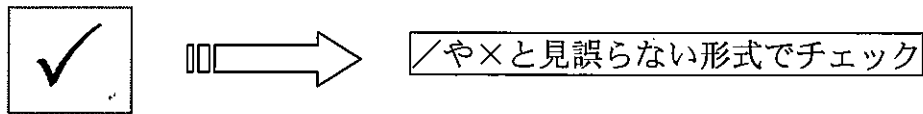
イ 採点にあたり、採点上の注意（採点基準）に照らして校内で取扱いを整理した内容が、確実に採点者・点検者に共有される仕組みを、マニュアル等で具体的に例示するなどして、整備すべきである。

ウ 採点・点検において、例えば、ある採点者は記述の解答内容を見て採点し、別の採点者は誤字・脱字のみをチェックして採点する等、何を重点的に見て採点・点検するのか、役割分担を明確にして実施すべきである。



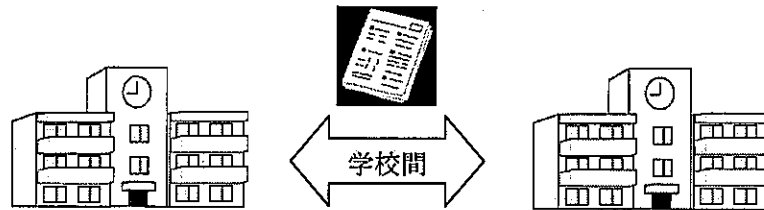
エ 記述式問題の解答用紙に採点・点検欄を別に設け、問題ごとの点数を記入する小計欄を設けるなど、採点者の立場に立って解答用紙のレイアウトを見直すべきである。

オ 採点・点検者の視点から、記述式問題の点検済みの印であるレ点を見直すなど、マニュアルを見直すべきである。



(2) その他検討すべき採点・点検方法

他の学校の受検者の答案を学校間で交換して再点検することや、合否判定の分岐点付近の受検者に対する再点検の強化など、重層的な点検の実施について検討することが望ましい。



2 採点・点検に専念できる環境の確保

現在、入学者選抜の日程としては一定程度確保できている現状からすれば、この日程を有効に活用した上で、採点に集中できる環境を整えるため、次のとおり提言する。

(1) 現在、採点日として設定している1日に加え、さらに1日を採点日として設定し、採点・点検に専念できる時間を確保することが望ましい。

なお、在校生の授業時間の確保との兼ね合いを考慮した上で、判断する必要がある。

【日程例】

学力 検査	面 接	面 接	採 点 日	採 点 日			(判 定 会 議)	(発 表 準 備)	合 格 発 表
----------	--------	--------	-------------	-------------	--	--	--------------------	--------------------	------------------

※ () 内は各学校が設定する日程の例

(2) 集中して採点・点検作業を行えるよう、作業する会議室スペース等をしっかりと確保すべきである。

なお、各学校で会議室スペース等に違いがあることから、実態に応じた対応を図ることが望ましい。

- (3) 学校全体の業務を把握し、校内の業務分担を明確にして、採点・点検に専念できる環境を整備すべきである。
(例：入学者選抜期間中の一人ひとりの業務内容・業務時間の管理徹底)
- (4) 採点・点検の際は、適度な緊張感を保ち、教員が集中して業務を遂行できるよう、休憩時間の確保を徹底させる工夫をすべきである。
(例：50分採点・点検 ⇒ 10分休憩などを、採点日のスケジュールに組み込んで徹底させる等)

3 作問・出題形式、解答用紙の工夫・改善

採点誤りが、作問や出題形式、解答用紙を見直すことで防止できるものが多いことから、次のとおり提言する。

- (1) 教科の特性に配慮しながら、記述式問題の分量やその質を含め、出題形式を見直すべきである。
また、その際には、受検者に求める学力を十分に考慮しながら、採点がしやすい問題となるよう、作問を工夫すべきである。
- (2) 問題の配点については、小問ごとの集計がしやすい工夫をすべきである。

4 採点・点検に対する意識の向上、規範意識の向上

採点・点検に当たる教員が自らの職務の重さを自覚し、適度な緊張感を保って、誤りなく採点・点検を行うよう、また、規範意識を向上させるため、管理職や教育委員会が主体的に取り組む必要があることから、次のとおり提言する。

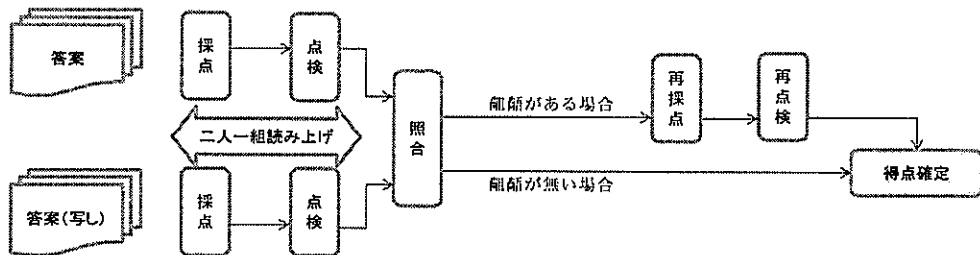
- (1) 管理職が、採点・点検時に声掛けを十分に行ったり、職務に対する自覚を促すなどにより、誤りのない採点・点検に対する意識を向上させるべきである。
- (2) 県教育委員会は、管理職の管理・監督者としての責任を明確にして、入学者選抜業務に対するマネジメントをしっかりと行うよう指導すべきである。
- (3) 行政文書の保存期間等、定められた規定の遵守を徹底するため、校内研修を随時実施すべきである。
- (4) 総合教育センターが実施する年次経験者研修などにおいて、定期的に規定の確認を行うなど、繰り返し規定の遵守を働きかけるべきである。

参 考

県教育委員会が直ちにマークシート方式を導入することが難しい場合に備え、従前の解答方法における改善策について付記する。なお、従前の解答方法で採点誤りゼロに向けて取り組むのであれば、これまで以上に採点・点検に関わる日数や時間の確保が必要となる。

ア マークシート方式によらない記号選択式問題の採点・点検方法

2系統で採点を行い、突き合わせて齟齬がないかを確認するか、その際に二人一組で読み上げ方式で行うことを組み合わせるなど、万全を期すべきである。



イ 採点・点検に専念できる環境の確保

マークシートによらない場合は、これまで採点・点検してきた分量を2系統で行うことを考えれば、さらに採点日数の確保が必要である。

ウ 作問・出題形式、解答用紙の工夫・改善

問題の配点については、記号選択式問題を従前の解答方式で行う場合には、特に、複雑にならないような工夫をすべきである。

Ⅳ 入学者選抜実施後の検証方法等

本委員会の報告後、県教育委員会が策定する「再発防止・改善策」の実施結果を検証するため、平成 29 年度入学者選抜合格発表後、入学までの間に採点誤りについて検証を行い、誤りがなかったことを明らかにする必要がある。

そこで、検証方法等について次のとおり提言し、これを具体化することで、県立高等学校を目指す中学生や保護者、県民の信頼を回復し、安心して受検できるようになることを望む。

- 受検者からの答案を確認したい旨の申し出に基づき、現行の自己情報開示請求制度とは別に、合格発表日以降、簡易に、答案の写しを速やかに交付できる仕組みを検討すべきである。
- 県教育委員会事務局における、抽出による再点検を検討すべきである。
- 入学者選抜実施後、再発防止・改善策が適正に機能しているかどうかを継続して検証し、次年度に向けて客観的な立場から改善点等を進言できる組織の設置を検討すべきである。

參考資料

県立高等学校入学者選抜調査改善委員会の設置及び運営に関する要綱

(趣旨)

第1条 この要綱は、県立高等学校入学者選抜調査改善委員会の設置及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(設置目的)

第2条 県立高等学校における入学者選抜（以下「入学者選抜」という。）の確実性及び信頼性を確保するため、現行の採点及び点検業務について検証し、採点誤りの原因究明を行い、今後の入学者選抜に向けた具体的な再発防止・改善策及び事後の検証方法を取りまとめるため、県立高等学校入学者選抜調査改善委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事項)

第3条 委員会は、次に掲げる事項について調査研究、協議し、その結果を報告する。

- (1) 入学者選抜における採点誤り等の調査分析と原因究明について
- (2) 入学者選抜における採点誤り等の再発防止策について
- (3) 入学者選抜における採点誤り等の再発防止策に関する事後の検証方法について
- (4) 前各号に掲げるもののほか、教育長から指示のあった事項

(設置期間)

第4条 委員会の設置期間は、平成29年3月31日までとする。

(構成員)

第5条 委員会は、教育に関する理解と見識を有する者並びに学校及び行政機関の関係者から選定した者10人以内をもって構成する。

- 2 委員会の構成員（以下「構成員」という。）の選任期間は、会議設置の日から委員会の設置期間満了までとする。ただし、構成員が欠けた場合における補欠の構成員の選任期間は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第6条 委員会に委員長及び副委員長各1人を置く。

- 2 委員長及び副委員長は教育委員会が指名する。
- 3 委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。
- 4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代理し、委員長が欠けたときはその職務を行う。

(会議)

第7条 委員会の会議は、委員長が招集し、その座長となる。

(公開)

第8条 委員会は、原則として公開とする。ただし、委員会が必要と認めた場合は、委員会の全部又は一部を非公開とすることができる。

2 委員会の開催予定、議事録等については、ホームページに掲載するなど広く情報提供するものとする。

(調査の依頼)

第9条 委員会は、その所掌事項について調査研究を行う等会議の円滑な運営を図るため、事務局に対して調査を依頼することができる。

2 事務局は、必要に応じて調査チームを設置し、その調査結果等を委員会に報告する。

(意見聴取)

第10条 委員会は、必要があるときは、関係者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(庶務)

第11条 委員会の庶務は、教育局指導部高校教育課において処理する。

(委任)

第12条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

(施行期日)

1 この要綱は、平成28年3月29日から施行する。

(会議の招集の特例)

2 委員会の最初の会議は、第7条の規定にかかわらず、教育長が召集する。

参考資料 2

県立高等学校入学者選抜調査改善委員会 委員名簿

	所属・団体等	職名等	氏 名
学識経験者	筑波大学 放送大学教養学部	名誉教授 教 授	田中 統治
	横浜国立大学 放送大学神奈川学習センター	名誉教授 客員教授	種田 保穂
	産業能率大学	入試企画部長	林 巧樹
保護者代表	神奈川県PTA協議会	会 長	笹原 和織
	神奈川県立高等学校PTA 連合会	会 長	松本 一彦
学校教育関係者	小田原市立城山中学校	校 長	佐藤 均
	横浜市立鶴ヶ峯中学校	校 長	稲田 義郎
	神奈川県立横須賀高等学校	校 長	九石美智穂
	神奈川県立高浜高等学校	校 長	土佐 明美
教育委員会	神奈川県教育委員会教育局 指導部	部 長	折笠 初雄

参考資料 3

県立高等学校入学者選抜調査改善委員会 審議経過

回	開催日	報告・協議内容等
第1回	3月29日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 採点誤りの概要について ○ 原因の究明に向けた調査内容について ○ 再発防止・改善策の策定に向けた今後の検討内容について
第2回	4月13日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査結果の報告について ○ 原因の究明について ○ 再発防止・改善策の検討について ○ 事後の検証方法について
第3回	4月28日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査結果の報告について ○ 原因の究明について ○ 再発防止・改善策の検討について ○ 事後の検証方法について ○ 中間とりまとめについて
第4回	5月9日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中間とりまとめについて
第5回	5月30日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 最終とりまとめについて

委員会における調査結果

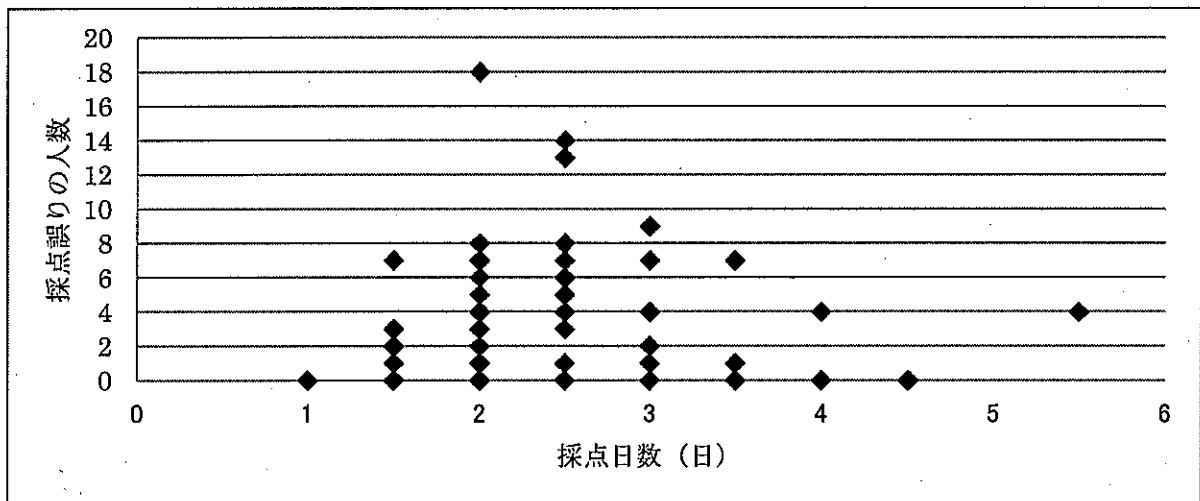
1 採点日数及び採点環境等と採点誤りの相関関係

採点日数や採点環境等と、採点誤りとの関係を調査した結果は次のとおり。

(1) 採点日数及び受検者数等と採点誤りとの相関関係

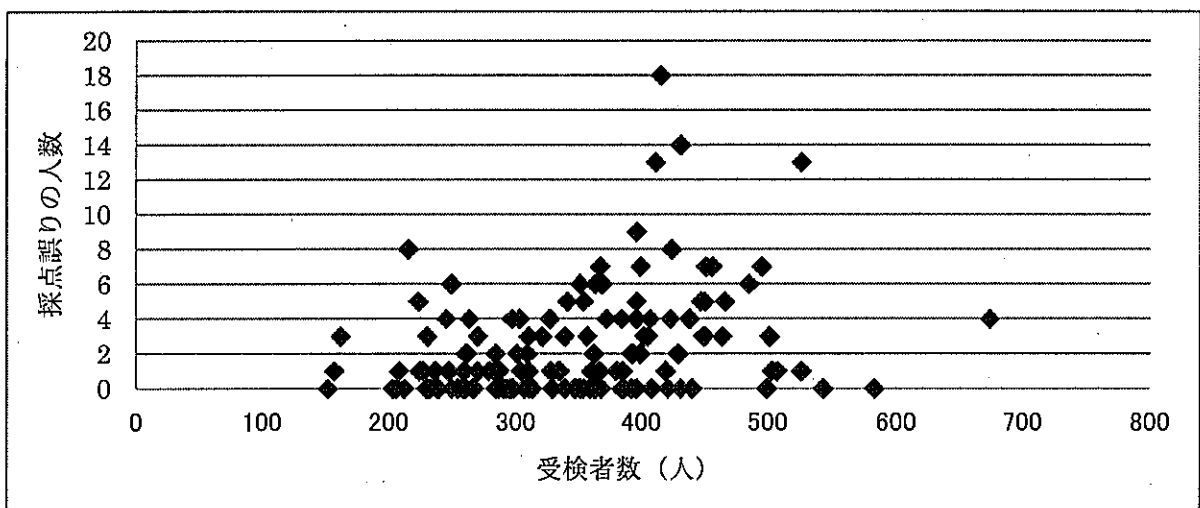
【資料1】採点日数と採点誤りの相関関係

相関係数 (※) = 0.14



【資料2】受検者数と採点誤りの相関関係

相関係数 = 0.32



○ 県立高校に調査を依頼し、採点日数や受検者数と採点誤りに関する相関関係を調査したが、そのデータからは、高い相関関係は見られなかった。

※「相関係数」とは、2種類のデータ(項目)についての関係の強さを表す数値で、-1から+1の間の値を取り、-1あるいは+1に近いほど関係性が強く、0に近いと弱い。一般的には、-0.7以下、もしくは+0.7以上であれば強い関係があるとされる。

(2) 採点時間、休憩時間の取得、採点環境等と採点誤りの関係

【資料3】 休憩時間の取得 (平成28年度入学者選抜)

方法	全日制	定時制
全職員一斉に休憩	88 (56) 課程	12 (2) 課程
教科ごとに設定して休憩	41 (26) 課程	3 課程
その他	7 (4) 課程	6 (1) 課程
合計	136 (86) 課程	21 (3) 課程
	157 (89) 課程	

() 内は採点誤りのあった課程数

【資料4】 採点誤りが発生した時間と採点誤りの関係

(平成28年度入学者選抜)

採点時間	9～11時	11～13時	13～15時	15～17時	17時～	不明
誤り件数	99件	38件	85件	90件	7件	14件
	29.7%	11.4%	25.5%	27.0%	2.1%	4.2%

【資料5】 職員一人あたりの採点・点検に関わった回数と採点誤りの関係

(平成28年度入学者選抜)

職員一人あたりの回数	全日制	定時制
1～200回	5 (0) 課程	20 (2) 課程
200～400回	97 (64) 課程	1 (1) 課程
400回超	34 (22) 課程	—
合計	136 (86) 課程	21 (3) 課程
	157 (89) 課程	

() 内は採点誤りのあった課程数

【資料6】 採点・点検の会場数

(平成28年度入学者選抜)

会場数	全日制	定時制
1～2会場	123 (78) 課程	21 (3) 課程
3会場～	13 (8) 課程	—
合計	136 (86) 課程	21 (3) 課程
	157 (89) 課程	

() 内は採点誤りのあった課程数

- 休憩時間の取得方法と誤りのあった課程数に高い相関関係は見られなかった。また、具体的な取得方法として、「最初は全職員が本部の指示に合わせ50分作業し10分の休憩、その後は進捗状況に合わせて教科ごとに取得」「採点・点検作業を職員全員のローテーションで行い、交代で取得」などが挙げられた。
- 採点誤りの発生時間が特定の時間に集中していることもなかった。
- 職員一人あたりの採点・点検に関わった回数が1～200回の学校（全日制）では採点誤りが発生していない。また、200回を超える学校では、採点誤りの発生率に大きな差は見られない。
- 採点・点検の会場数と採点誤りに高い相関関係は見られなかった。

(3) 学校からの聞き取り結果

- 教科によって採点時間が異なり、他の教科に対して遅れているため、追いつかなければならない、早く終わらせたいという心理が働いた。タイムプレッシャーはあった。その中で、休憩時間がうまく取れなかったところがあった。
- 特に受検者数の多い学校、特色検査のある学校では、時間的なプレッシャーがあった。
- 採点環境について、会議室が狭く、他の教科と接近した状況で採点を行っていたため、集中できなかった。

2 誤りの起こりやすい箇所の特定による原因分析

採点誤りの多い箇所の特定及びその内容について調査した結果は次のとおり。

(1) 採点誤りの起こりやすい箇所の分析

【資料7】県立高等学校における入学者選抜に係る採点の誤りの問題別集計

1 平成27年度

教科	記号選択式			記述式		合計
	選択肢から1つを選択	選択肢から複数を選択し正しい順に並べる	選択肢から複数を選択する(順序不問)	用語・数値・漢字等の記述	まとまった文章等の記述	
英語	3(1)	1(1)	0	0(1)	9	13(3)
国語	7	0	0	10	20	37
数学	0	0	1	7	24	32
理科	7	0	1	0	6	14
社会	2	1	0	0	7	10
合計	19(1)	2(1)	2	17(1)	66	106(3)

※ 英語の()は定時制の問題における誤りの数

2 平成28年度

教科	記号選択式			記述式		合計
	選択肢から1つを選択	選択肢から複数を選択し正しい順に並べる	選択肢から複数を選択する(順序不問)	用語・数値・漢字等の記述	まとまった文章等の記述	
英語	10(1)	2	0	3	15	30(1)
国語	2	0	0	10(1)	34(2)	46(3)
数学	0	0	0	12	12	24
理科	7	0	0	2	8	17
社会	14	3	2	22	58	99
合計	33(1)	5	2	49(1)	127(2)	216(4)

※ 英語、国語の()は定時制の問題における誤りの数

- 記号選択式の問題と記述式の問題別にみると、記述式の問題に誤りが多い。また、その中でもまとまった文章等の記述に誤りが多い。

【資料8】記述式問題（まとまった文章等を記述する問題）の採点誤りの状況

《各教科における代表的な正誤の誤りの例》

[英語]平成28年度

問題	内容	配点
問5	<p>(ア)「写真を撮ってもらう人を探していることに気が付いた時に相手に何と声をかけるか」という問題</p> <p>分析結果 採点上の注意の適用誤り</p> <p>●「写真を撮りましょうか？」のように申し出る表現が正答例として考えられるところ、「写真を撮ってくださいますか？」と相手に依頼する表現を使ったものを正答としていた</p> <p>(例) Would you take a picture ?</p> <p>(イ)「新しく中学に入学してくる新1年生に、よい中学校生活を送るためのアドバイスをするとしたらあなたは何と言うか」を英語で書く問題</p> <p>分析結果 採点上の注意の適用誤り</p> <p>●語法上の誤り（主語の取違い）を見逃していた</p> <p>(例) They should take care of new first-year students. →今度入学する新入生について記述すべきところ、クラスの生徒について記述していた</p>	<p>4点満点</p> <p>中間点は2点。</p> <p>・文法・語法上の誤り、綴り字の誤り、文字及び符号に係る誤りは2点減点。</p>

[国語]平成27年度

問題	内容	配点
問三	<p>(イ)「事態は一変した。」内容について、原因を含めて説明する問題</p> <p>分析結果 採点上の注意の適用誤り</p> <p>●表現の問題（主語の重複）を見逃していた→3件</p> <p>(例)「竹の仕事が…注文が打ち切られた。」 「竹の仕事が…仕事が減った。」 「竹の仕事が…仕事量は激減した。」</p>	<p>6点満点</p> <p>・誤字・脱字は数に関わらず2点減点。</p> <p>・表現に問題があるが許容できると判断した場合は数に関わらず2点減点。</p> <p>(参考) *「一変した」内容と原因に触れていること。</p>
問五	<p>(イ)「私たちが意識すべきこと」「具体的な二つの取り組み」に触れながら話し合いの内容をまとめる問題</p> <p>分析結果 その他</p> <p>●中間点の記載誤り</p> <p>(例) 2点減点で6と記載すべきところ、減点のメモとして余白に記載した-2に引きずられて得点を2と記載してしまった</p>	<p>8点満点</p> <p>・誤字・脱字は数に関わらず2点減点。</p> <p>・表現に問題があるが許容できると判断した場合は数に関わらず2点減点。</p> <p>(参考) *内容は次の三点に触れていること</p>

		「自然界で多様な生物がバランスを保って生きていることを意識すること。」 「外来生物をむやみに持ち込まない」こと。 「外来生物を飼うときは責任をもって管理する」こと。
--	--	--

[国語] 平成 28 年度

問題	内容	配点
問五	<p>(イ) 海外の人たちと交流するために「意識しなければならない」ことを話し合いの内容をふまえながらまとめる問題</p> <p>分析結果</p> <p>● 誤字・脱字見落とし (5件) 「意思」→「意志」 (2件) 「価値観」→「価直観」 →「価 <u>イ</u>+置 (にんべんに置) 観」 「意識をもつ」→「意識を持つ」</p> <p>● 指定語句等見落とし (3件) (文末指定) 「意識をもつべきだ。」 →「意識するべきだ。」 (2件) →「意識しなければならない。」</p>	<p>8点満点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誤字・脱字は数に関わらず2点減点。 ・表現に問題があるが許容できると判断した場合は数に関わらず2点減点。 <p>(参考) *内容は次の三点に触れていること ・「英語を勉強することはもちろん、英語以外の言葉にも興味を広げる」こと。 ・「日本の文化を理解する」こと。 ・「国による文化や価値観の違いをふまえて意思を伝え合う」こと。</p>

[数学] 平成 27 年度

問題	内容	配点
問7	<p>2つの三角形の相似の証明を記述する問題</p> <p>分析結果</p> <p>● 誤字等を見逃していた (16件) (例) 「弧AC」→「孤AC」</p>	<p>10点満点</p> <p>1組目の角の相等を示して3点、2組目の角の相等を示して5点、結論を記述して2点。 (採点基準以外の疑問点は、減点の設定等を含め校内で統一すること。)</p>

[理科] 平成 28 年度

問題	内容	配点
問 6	<p>(ウ) (i) 20℃に冷却しても物質Bが水溶液中に出てこない理由を20字以内で記述する問題</p> <p>分析結果</p> <p>誤字・脱字見落とし (4件)</p> <p>(例) 「状態」→「状能」 「達」→横棒が一本少ない</p>	<p>4点満点</p> <p>○記述問題3問とも次のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解答すべき要素(1つ)の内容が十分な場合、正答4点 ・誤字・脱字、句読点に係る誤りがあれば1点減点 ・配点は次の3種類 <p>正答4点 内容が○</p> <p>中間点3点 内容が○+誤字等</p> <p>誤答0点 内容が×</p>

[社会] 平成 28 年度

問題	内容	配点
問 1	<p>(カ) ザンビアにおけるモノカルチャー経済の現状と対策について75字以内で記述する問題</p> <p>分析結果</p> <p>誤字・脱字見落とし (38件)</p> <p>(例) 「ザンビア」→「サンビア」 「輸出」→「論出」 「開発」→「関発」</p>	<p>8点満点</p> <p>指定語句*が欠落していたり、必要な二つの内容のうち一つが不十分であれば、4点減点。誤字脱字は数に関わらず2点減点。</p> <p>(参考) *指定語句の条件 「変動」という語を用いること。</p>
問 6	<p>(エ) 日本人の寿命の推移の傾向と政府の対策を読み取り、65字以内で記述する問題</p> <p>分析結果</p> <p>誤字・脱字見落とし (13件)</p> <p>(例) 均(5件)、寿(3件)、健(1件)、善(1件)、療(1件)、「少なく」→「小なく」(1件)、「広がって」→「広って」(1件)</p>	<p>8点満点</p> <p>指定語句が欠落していたり、必要な二つの内容*のうち一つが不十分であれば、4点減点。誤字・脱字は数に関わらず2点減点。</p> <p>(参考) *必要な二つの内容 ①平均寿命と健康寿命の差が拡大している傾向にあること。 ②課題を改善することで、社会保障負担が減少するなどの財政的な効果があること。</p>

- 記号選択式の問題における、選択肢から1つを選択する問題と、選択肢から複数を選択したり、選択したものを並び替える問題では、誤りの発生頻度に特に差が見られない。
- 記述式問題に関する正誤の誤りでの教科別の特徴は次のとおりである。
 - ・ 英語は、スペル誤りの見逃しによる誤りが多い。
 - ・ 国語は、文末指定や誤字の見逃しによる誤りが多い。
 - ・ 数学は、記号や誤字の見逃しによる誤りが多い。
 - ・ 理科は、誤字の見逃しによる誤りが多い。
 - ・ 社会は、指定語句や誤字の見逃しによる誤りが多い。
 ※ これ以外は、主に単純に正答を誤答又は誤答を正答にしているケースである。
- 小計・合計の誤りの特徴は次のとおりである。
 - ・ 小計を算出する際、配点を誤ったと思われるものが多い。特に小問ごとの配点が複雑でわかりにくい問題ほど、小計の誤りが多い。
 - ・ バツの斜線を1点と見誤ったケースがあった。
 - ・ 点検の際につける印✓(レ点)を斜線と見誤り×と判断して、小計に反映しなかったケースがあった。

(2) 学校からの聞き取り結果

- 記述の内容に注意が偏り、誤字や脱字の誤りに気付かなかった。
- 逐一正答を確認することなく、記憶に頼って採点を行っていた結果、誤答を正答としてしまった。
- 採点者1の採点が正しく行われているという思い込みから、それを追認してしまう、あるいは点検者が複数いる中で依存してしまった。
- 様々な解答がある中で、採点上の注意(採点基準)に基づく校内の取扱いを徹底・共有できなかった。

3 採点誤りに関わった採点・点検者の教科及び職の関係

【資料9-1】入学者選抜における誤りに関わった教職員の教科及び職と人数の関係について

平成27年度入学者選抜（小計・合計の誤り）における誤りに関わった教職員の教科と人数の関係について

	外国語 (英語)	国語	数学	理科	社会	特色検査	計
誤りの件数	14	24	8	11	21	1	79
当該教科	23 54.8%	33 40.7%	10 41.7%	24 70.6%	27 44.3%	3	117
他教科	19 45.2%	48 59.3%	14 58.3%	10 29.4%	34 55.7%		125
合計	42	81	24	34	61	3	245

平成27年度入学者選抜（採点の正誤）における誤りに関わった教職員の教科と人数の関係について

	外国語 (英語)	国語	数学	理科	社会	特色検査	計
誤りの件数	16	37	32	14	10	0	109
当該教科	48 76.2%	102 67.1%	111 84.7%	37 72.5%	22 56.4%	0	320
他教科	15 23.8%	50 32.9%	20 15.3%	14 27.5%	17 43.6%		116
合計	63	152	131	51	39	0	436

平成28年度入学者選抜（小計・合計の誤り）における誤りに関わった教職員の教科と人数の関係について

	外国語 (英語)	国語	数学	理科	社会	特色検査	計
誤りの件数	15	26	11	21	32	3	108
当該教科	34 75.6%	29 36.7%	24 72.7%	51 78.5%	35 35.0%	9	173
他教科	11 24.4%	50 63.3%	9 27.3%	14 21.5%	65 65.0%		149
合計	45	79	33	65	100	9	331

平成28年度入学者選抜（採点の正誤）における誤りに関わった教職員の教科と人数の関係について

	外国語 (英語)	国語	数学	理科	社会	特色検査	計
誤りの件数	31	49	24	17	99	5	225
当該教科	101 78.9%	164 82.4%	77 80.2%	61 91.0%	287 73.6%	19	690
他教科	27 21.1%	35 17.6%	19 19.8%	6 9.0%	103 26.4%		190
合計	128	199	96	67	390	19	899

【資料9-2】

平成27年度入学者選抜（小計・合計の誤り）における誤りに関わった教職員の職と人数の関係について

	外国語 (英語)	国語	数学	理科	社会	特色検査	計
誤りの件数	14	24	8	11	21	1	79
副校長・教頭	0	0	0	0	0	1	1
総括教諭	2	7	5	4	7	1	26
教諭(常勤)	33	60	18	21	43	1	176
再任用教諭	2	7	0	2	5	0	16
臨時的任用教諭	3	5	0	3	4	0	15
養護教諭	2	1	1	1	2	0	7
再任用養護教諭	0	0	0	0	0	0	0
臨任養護教諭	0	1	0	0	0	0	1
実習助手	0	0	0	3	0	0	3
臨任実習助手	0	0	0	0	0	0	0
非常勤講師	0	0	0	0	0	0	0
合計	42	81	24	34	61	3	245

平成27年度入学者選抜（採点の正誤）における誤りに関わった教職員の職と人数の関係について

	外国語 (英語)	国語	数学	理科	社会	特色検査	計
誤りの件数	16	37	32	14	10	0	109
副校長・教頭	0	1	0	0	0	0	1
総括教諭	10	14	9	8	7	0	48
教諭(常勤)	40	102	108	23	25	0	298
再任用教諭	6	19	9	7	5	0	46
臨時的任用教諭	6	13	2	3	1	0	25
養護教諭	1	1	2	0	1	0	5
再任用養護教諭	0	2	0	0	0	0	2
臨任養護教諭	0	0	0	0	0	0	0
実習助手	0	0	0	7	0	0	7
臨任実習助手	0	0	1	3	0	0	4
非常勤講師	0	0	0	0	0	0	0
合計	63	152	131	51	39	0	436

平成28年度入学者選抜（小計・合計の誤り）における誤りに関わった教職員の職と人数の関係について

	外国語 (英語)	国語	数学	理科	社会	特色検査	計
誤りの件数	15	26	11	21	32	3	108
副校長・教頭	0	0	0	0	0	0	0
総括教諭	2	11	1	8	10	0	32
教諭(常勤)	35	54	24	38	76	8	235
再任用教諭	2	4	4	4	5	1	20
臨時的任用教諭	5	8	4	11	4	0	32
養護教諭	0	1	0	2	3	0	6
再任用養護教諭	0	0	0	0	0	0	0
臨任養護教諭	1	0	0	0	0	0	1
実習助手	0	1	0	2	1	0	4
臨任実習助手	0	0	0	0	1	0	1
非常勤講師	0	0	0	0	0	0	0
合計	45	79	33	65	100	9	331

平成28年度入学者選抜（採点の正誤）における誤りに関わった教職員の職と人数の関係について

	外国語 (英語)	国語	数学	理科	社会	特色検査	計
誤りの件数	31	49	24	17	99	5	225
副校長・教頭	0	1	0	1	1	0	3
総括教諭	9	20	10	10	51	2	102
教諭(常勤)	93	144	71	39	277	17	641
再任用教諭	12	6	7	5	29	0	59
臨時的任用教諭	12	21	7	1	27	0	68
養護教諭	0	1	1	0	4	0	6
再任用養護教諭	0	0	0	1	0	0	1
臨任養護教諭	0	1	0	0	0	0	1
実習助手	1	1	0	10	0	0	12
臨任実習助手	0	4	0	0	1	0	5
非常勤講師	1	0	0	0	0	0	1
合計	128	199	96	67	390	19	899

- 問題の正誤の採点誤りは記述問題に多く、記述問題の採点は主に担当教科の教員が行うため、担当教科の教員が誤りに関わった比率が高い。
- 小計・合計の算出については、担当教科以外の教員が多く関わるため、担当教科以外の教員が誤りに関わった比率が高い。
- 学校の教職員全員体制で採点を行っている中で、特定の職に偏って採点誤りがあったとは言えない。

第1回 県立高等学校入学者選抜調査改善委員会 議事要旨

- 1 日 時 平成28年3月29日（火） 10:00～12:00
- 2 場 所 横浜市開港記念会館 2階7号室
- 3 議 事 等 (1) 原因の究明に向けた調査内容について
(2) 再発防止・改善策の策定に向けた今後の検討内容について
- 4 出 席 者 田中 統治 委員長 種田 保穂 副委員長 林 巧樹 委員
遊部 裕司 氏 松本 一彦 委員 佐藤 均 委員
稲田 義郎 委員 九石美智穂 委員 土佐 明美 委員
折笠 初雄 委員

(遊部氏は、笹原委員代理)

5 発言要旨

(1) 原因究明に向けた調査内容について

- 問題のどの部分に誤りが多いのか、学校による偏りがあるのかを確認する必要がある。
- 受検者数と誤りの数の整合性や関係性を含めて調査が必要である。
- 誤りのあった問題の箇所、採点者の立場（担当教科、常勤職員等）まで究明する必要がある。
- 採点者、点検者の休憩のタイミングや頻度がわかれば、作業における疲労度蓄積という観点から原因を考察することができる。
- マニュアルに沿った実務の中で、現場の先生方が無理を感じている点について聞き取る必要がある。
- 記述式とその他の解答形式について、結果にどのような傾向があるかの調査も必要。
- 小計点の計算誤りは、点検を重ねても発見できておらず、答案用紙の実例を確認したい。
- 記述式の間接点の出し方は、高大接続の学力テストでも問題になっており、採点する側の負荷の大きさの確認が必要。
- スケジュールと点検時間の余裕度の問題については、業務に携わった教員の声を聞く必要がある。
- いくつかの数字が全部書いてあれば正解という問題、順不同でも正解という問題もあり、これらの違いによる誤りの状況も調査する必要がある。
- 記述式の問題と誤りの関係については念入りに調べる必要がある。
- 記述問題で、採点前に、校内での統一基準をある程度作ってから採点を始めているのか、あるいは、採点をしながら基準を作っているのか調査が必要。

- 中間点の基準について、学校では、一覧表や模造紙等を書き出し、採点者すべてが確認しながら採点を進めている。通常は全体を見て統一基準を作ると思うが、その状況を確認したい。

(2) 原因の究明について

- マニュアルが制度化されているということであれば、構造的な原因が潜んでいるのではないか。
- 計算間違いを発見するメカニズム、セーフティネットが働かないという、学校の管理体制の問題ともつながっているのではないか。
- 同じ問題でもいろいろな種類の思考回路で採点しなければならないことがあり、一人で行うと、疲労度とともに、精度が落ちることも考えられる。
- 社会科では、小問で記述と合わせて 18 点の問題など、採点が複雑であり、できるだけシンプルな方が採点しやすいのではないか。
- 27、28 年度では 28 年度の誤りが多い。両方の解答用紙を見ると、明らかに 28 年度の方が複雑に見えるので、作問がネックだった可能性がある。

(3) 再発防止・改善策について

- 交通事故等の件数は 14 時がピークと言われている。注意力が欠如し、誤りが出やすい時間帯に休憩を入れないと、誤りは改善できないのではないか。
- 注意力の限界は 30 分であり、採点の分業化が有効ではないか。
- 二人一緒に指差ししながら、共同で作業する方法はどうか。誤りのなかった学校から事例を集められるとよい。
- 採点誤りが出ないような作問を考えていくことが重要。
- ヒューマンエラーをなくすために、マークシート方式の導入も検討する必要がある。
- 記述式問題以外の単純な誤りは、マークシート方式にすればクリアできるので、誤りは起きないのではないか。
- 中学校においては、学習状況調査等でマークシート方式を利用している。
- 日程を延ばすことが難しい状況を考えると、記述式以外はマークシート方式にして、記述式は学校で採点するのがよいのではないか。

(4) 自己情報開示について

- 保護者の立場からすると、全ての解答結果が手元に送られ、確認を取れる方法があってもよいのではないか。
- 今回、開示請求した方と間違いのある方が合致して判明したが、表面に出なかった可能性もあり、その原因も考えなければならない。

第2回 県立高等学校入学者選抜調査改善委員会 議事要旨

- 1 日 時 平成28年4月13日(水) 15:00~17:00
- 2 場 所 神奈川県教育委員会 委員会会議室
- 3 議 事 等 (1) 原因の究明について
(2) 再発防止・改善策の検討について
(3) 事後の検証方法について
- 4 出 席 者 田中 統治 委員長 種田 保穂 副委員長 林 巧樹 委員
遊部 裕司 氏 松本 一彦 委員 佐藤 均 委員
稲田 義郎 委員 九石美智穂 委員 土佐 明美 委員
折笠 初雄 委員

(遊部氏は、笹原委員代理)

5 発言要旨

(1) 原因の究明について

- 受検者数と採点にかかった時間数はあるが、採点に関わった人の数がわからないと、負担の度合いがわからない。
- 学校の規模によって教員の数が異なるので、必ずしも受検者が多いから負担も大きいわけではないのではないか。
- 例年、土日を挟んで採点を行っているのか。採点を土曜日または日曜日に実施した学校に誤りはあるのか。
- 答案用紙を見ていると、作問と処理方法がポイントであり、この点の協議が必要。
- 調査の結果、見えないところに原因があるのではないか。採点を行った部屋については大事な要素であり、調査が必要。
- 他教科に比して遅れているために追いつきたい、あるいは早く終わらせたいという心理が働いた面があるのではないか。ケアレスミスを誘発しやすい環境を改善する必要性がある。
- 点検がほとんど機能していなかったというのが問題である。
- 誤りのなかった30校の中には、誤りが起こりうるものだという前提で、シビアに点検をされていた学校があったのではないか。
- 問題番号の書いてある狭い欄に、回数を追うごとに多くの記号が記入されるので、視覚的に頭に入らず、誤りを誘発しているのではないか。
- 普段行っている採点とは異なる方法での採点となっている。記述式問題の中間点の共通認識が必要。
- 実際の答案を確認して、かなり狭いと感じた。何回もチェックを入れることになるので、誤りが起きてしまうのではないか。

- 複数の採点・点検で、分かりやすいようにペンの色を変えているが、目に負担がかかっているのではないか。
- 採点のスタート時点と、最後の時点では、気分的に大分違うと思われる。スタート時点のプレッシャーが誤りの原因の一因ではないか。
- 最後の方になってくると、ゴールが見え、時間をかけてできるというゆとりもでき、誤りが起こらないのではないか。
- 採点に関わった教員の人数、一人あたり何人くらいの受検者の採点をしたのか、調査の継続が必要。
- 採点者の体力的な限界、集中力の限界があるので、この問題をあわせて考えていく必要がある。
- 新任の先生も採点に関わっていると思うのが、採点方法等について、レクチャーが必要であり、ある程度事前に練習しないと難しいのではないか。
- 神奈川県の問題は、記述式のウェイトが大きく、パターン化している面もある。
- 採点する人のゆとりや、取り組む姿勢も大きく影響する。
- 「土日の採点は気持ちが採点に向きづらい」とあるが、仕事でやらなければならないのであれば、集中してやるべきではないか。
- 今後、学校の統合の話があるが、受検者がどこかの学校に偏った時に、同じやり方、日程でできるのかが心配である。
- 2月中旬から3月初めは3年生の卒業試験を行っている学校が多く、卒業試験の問題作成が入学者選抜業務と並行して行われている。学校によっては、2月の最終週は卒業式に向けた準備や生徒の指導もあるので、業務が重なる時期である。
- 特色検査を行っている学校は、2月19日を検査日に充てざるを得ず、採点は22日を使わないとできない状況である。学校によっては学力検査と面接と特色検査の3種類を行うため、採点は6科目になる。採点の量も無関係とは言えない状況である。

(2) 再発防止・改善策について

- 基本マニュアルの改善を図る必要がある。
- 採点が一番体力的にもピークに達した金曜日から始まっており、体力限界期からスタートしていることが問題。面接が終わってから、1日あけて採点してはどうか。
- 朝のミーティングの時間をとり、注意喚起をしたのちに採点し、後半スピードアップする体制をとったほうがよいのではないか。
- 東京都では、コピーをとって2系統で採点し、その後突き合わせ、確認する体制をとっている。一人が採点して、それをまた次の方が点検すると、どうしても誤りが出るので、まっさらな目で採点し、その後突き合わせる方法がよいのではないか。
- 一人が発声し、一人が指差しというような動作を交えた点検方法を取り入れていけば、誤りの原因を取り除けるのではないか。

- 1つの問題を4人で採点・点検する場合に、4人の枠がきちんと確保された答案用紙を作るべき。余白への採点は誤りを生む大きな原因になっているので、適正に点検されていることがわかるような答案用紙にする必要がある。
- 東京都の答案用紙は、採点を考えた印刷となっており、一つの対応策として考えられる。記号などを記入する欄を工夫する必要がある、特にまとまった文章での記述での誤りが多いので、そのような記述、答案に改善する必要がある。
- 2系統で行う方法については、現場の教員からも意見が出ている。
- 生徒は太枠の解答欄に記入し、その下にもう一つ採点者のチェック欄を作るのも、防止策になるのではないか。
- 入学者選抜の採点業務としてきちんとスケジュール化する必要がある。
- 採点については、他の学校の答案用紙をお互いにチェックするという検証方法もある。
- 合否ラインの答案について、管理職によるチェックを行っている学校がある。受検生の合否にかかわる重要なチェックなので、取り入れた方がよい。
- 再チェックについては、土日に数名で行うことで効果があった。採点が終わる日程が週末に来ると、答案用紙を週末に点検可能となる。
- 誤りをなくすことは不可能だと思うが、誤りはあるという前提でなくす方法として一番重要なのは点検である。
- 採点よりも点検にウェイトを置く必要がある。点検者は、誤りはないものだと思って点検するから誤りを起こしてしまうのだと思う。採点よりも点検に時間をかけないと、誤りを見過ごすことに繋がっていくのではないか。
- 採点、採点、点検、点検の順にやっていたものを、採点、点検、もう1回採点を行い、最終的に2回の点検を再度もう1回行えば、もっと誤りは少なくなるのではないか。誤りを点検でチェックすることが大切である。

(3) マークシートについて

- 記述式をどうするかは課題であるが、29年度に向けて考えると、マークシートという選択肢が一番ではないか。
- 東京都では記述式も全部デジタル化して採点している。記述式以外はマークシートで、記述式だけは学校で集中して行う方法が考えられ、大きな相関が見られないのであれば、根本的に変えていく必要がある。
- 記述式問題はその教科担当が採点するので、記号式問題をマークシート方式で行うことができれば、教科担当の先生は記述式問題に集中できるメリットがある。
- 受検生がマークシートと記述の解答用紙とを分けなければならない場合、2箇所を受検番号、名前を書くなど手間がかかる。中学校側での了解が取れば、採点する側も記述に集中できる。
- 記述だけであれば、点数の丸つけも大きく行えるので、採点もしやすいのではないか。
- 記述式を学校で採点するのであれば、別紙という形をとるのはやむを得な

いが、一つの教科の間の中に記述式が何箇所かあると場所が飛ぶので難しい。記述式は問の最後にまとめる形であれば負担にならないのではないか。

- 大学入試によっては、マークシートの様式に書かせるところもあるが、文字がかすれたり、消えたりする。記述は大問の最後にするなど配置を考えないと受検生は混乱するので、作問上の問題、制約が出てくるのではないか。
- マークシート方式は、適正な選抜にならないという意見もあるが、ケアレスミスを誘発しない。より受検生の利益になる方式ということで考えると、マークシート方式がよい。
- 中学生は、全国一斉学力調査をマークシートで受けているので、全く初めてではないと思うが、入学者選抜で取り入れられることの不安はあるのではないか。
- 記述式が増えたことは良いと思うが、社会や理科などは難しいと感じた。中学校現場でも、定期テストで記述式の思考力、判断力を意識して取り入れており、入学者選抜においてもそれが反映されるべき。
- マークシートはひとつの方法であり、検査から発表まで平日で9日間あるが、マークシートの導入により必要な日程が長くなるか、短くなるかを含めて検討する必要がある。
- 最終的にマークシートの方に行くのではなくて、従来の方法で誤りが無いやり方をもう少し探る方が大切。
- マークシートを導入するにしても、今までの方式を継続するにしても、記述式が問題になる。2人組で声を出して作業するなどの方法を取り入れることで、改善できるのではないか。
- 教員からは、安易にマークシートを導入するのではなく、今のやり方で誤りを無くすことが大事だという声、普段の定期テストのように大胆に丸をつけていくのには慣れていますが、小さなところに書くのは、採点というよりも記号を埋めていく作業になってしまうという声などもあった。
- 記述式が記号選択式の中に入り込んでいるような問題になっているので、マークシート方式の導入については、他の採用例を参考にしながら、技術的な問題を含めた検討が必要。

(4) 事後の検証について

- 再発防止策が正しく機能しているかどうか、来年度の入学者選抜後にも検証する必要がある。答案の開示について簡易な方法を検討し、受検者が確認しやすくすること等が考えられる。
- 教育委員会が記述の採点に加わるなど、改善後のマニュアルの有効性を含め、教育委員会によるチェックも必要ではないか。
- 内部だけではなく、外部からの客観的な検証方法を取り入れることも必要ではないか。
- 特色検査をやっている学校とそうでない学校があるので、総チェックする機会を持てると緊張感も出て、客観的な面での検証効果が得られる。
- 東京都は答案用紙の写しを受検生に返すことを始めたが、中学校の現場と

して、受検生が自分の答案をコピーのような形で戻してもらった時、支障はあるか。

- 開示希望者は、合否のボーダーに近い人だと思うので、全員に返す必要はないのではないか。
- チェック機能の検証を行う必要がある。ベテランの入学者選抜担当の経験値を検証の中に活かすべきである。

第3回 県立高等学校入学者選抜調査改善委員会 議事要旨

- 1 日 時 平成28年4月28日(木) 15:00~16:45
- 2 場 所 神奈川県庁 新庁舎5階 第5B会議室
- 3 議 事 等 (1) 原因の究明について
(2) 再発防止・改善策の検討について
(3) 事後の検証方法について
(4) 「中間とりまとめ」の検討について
- 4 出 席 者 田中 統治 委員長 種田 保穂 副委員長 林 巧樹 委員
遊部 裕司 氏 松本 一彦 委員 佐藤 均 委員
稲田 義郎 委員 九石美智穂 委員 土佐 明美 委員
折笠 初雄 委員

(遊部氏は、笹原委員代理)

5 発言要旨

(1) 原因の究明について

- 採点環境と誤りの件数との傾向や特徴は見られたのか。
- 10回もの点検が機能していなかったことには、ヒューマンエラーと組織上のエラーの両面がある。
- 記述式問題における内容と字句チェックの分担が教科により縦割りになっているような場合には、協力関係、意思疎通が上手くいっていなかったことが考えられる。
- 教育委員会が示す採点上の注意で対応できない場合、原則の範囲内で校内の取扱いを統一するところの徹底ができなかった。
- 採点の段階で誤ったが、点検で修正したというのは件数として出てこない。採点と点検、どちらに問題があったかがはっきりしない。問題がある方の回数を増やす必要はあるが、誤りは出るものだと思うので、点検のところをいかにしっかりできるか考えるのがよい。
- 数学の証明問題で内容は解けているのに、漢字の誤りにより減点になるのには、違和感がある。
- 中学で定期テスト等を作るとき、漢字で書くようにといった条件を指定する場合もあるし、中身が合っていればよい場合もあるので、どちらがよいか一概には言えない。
- 今年度、特に誤字が増えている原因には、27年度との問題の質の違いや、問題文にザンビアと書いてあるのにサンビアと書いてしまうなど、書く力が低下していることが関係しているのではないか。

- 10 回という回数だけを追い求めたことが、チェック機能を上手く働かせることに繋がっていないという実態はみえた。
- 通常の定期テスト等の採点の方式とは違うので、慣れていない採点者は集中できなかったという原因もあるのではないか。
- 記述問題の採点について、2名の採点者と2名の点検者の見るポイントの役割分担ができていない。
- マニュアルが大事なのにそれが不徹底だったために起きている誤りも多くあるのではないか。

(2) 再発防止・改善策の検討について

- 何度も採点・点検をするのであれば、回ごとに視点を変え、内容と同時に誤字・脱字を確認すれば、見落としていた部分がなくなるのではないか。
- 2回の点検によりレ点が増えることになるが、作業量が増すに従い、レ点を打つことが惰性になってしまっているのではないか。1回目、2回目の点検で記号を変える等の工夫が必要。
- 文字の欠落が3つ以上あった場合は×にするという方法はどうか。
- 記述式問題で誤字等をどの程度見るかは作問にも関わる重要な部分であり、おおまかにすることも大事ではないか。
- 答案用紙の枚数が多く、集中力を持続して採点・点検を行うのは、非常に大変な作業でもあり、ボーダーのところは最後まで一回点検を行っている。
- 校内で誤りが指摘され、修正されるケースがあった場合、他の採点者にも共有、注意喚起できていたかどうか。全体の中で共有化されていく方法も考えていけるとよい。
- 採点等は、最初に新人の先生が行い、次に長い経験のある先生が行う方が、初めて採点に係わる先生方も気持ちを深く入れながら行えるのではないか。
- マークシートで人の成果を測る方法は、保護者としてはできるだけ避けてもらいたい。
- 記述方式は受検生側からすると、正しく採点されているか不安がある。センター試験の問題も知識の量だけでなく、思考力、判断力を問うような良い問題ができています。マークシートで選択問題が増えることになれば、今の採点の問題が、作問の問題に変わっていくことになる。
- 採点の業務に関して、管理職の役割はどう明記されているのか。
- 学校で作る入選委員会には、統括として教頭、副校長が入り、その上に校長が管理監督する形になっている。採点・点検の会場にも入選委員会、統括する教頭、副校長は同席し、採点の訂正があれば、教頭、副校長が印を押すこともマニュアルに記載されているので、すべての業務について、教頭、副校長によって管理はされている。
- 管理職の声掛けだけではなく、最終的な点検を必ず行うよう徹底する必要がある。
- 点検機能について、工夫・改善していくことが重要。採点誤りがなかった30校をモデルにしてほしい。

- 教育委員会にも入学者選抜の業務に関して、全体への注意喚起や共有すべき情報があれば提供するような工夫をしてもらうことが必要。

(3) 事後の検証方法について

- 平成 29 年度の入学者選抜実施後の検証は合格発表後、入学までの間に検証して、誤りがなかったことを証明してもらいたい。
- 誤りがなかったことの証明については、どのような形で行っていくのか検討し、抜き打ちや抽出も含め、やるべきことはやっていく必要がある。
- 特に誤りが多い問題や箇所については情報共有した上で、もう一度点検を促すということも、合格発表後にも行ってほしい。
- 開示は、できるだけ簡略にやっていくことも必要である。
- 子どもたちの人生を左右することなので、誤りは絶対いけないという強い意志のもとに採点するという方向性を示す必要がある。全員に早く答案を返すということも含めてできる限りのことをしてほしい。
- 組織としての責任体制を検証してやっていくべき。受検生からの開示を受けて、点検したら誤りがあったという事態は避けなければならない。
- 29 年度に誤りゼロにすることが前提にあるとともに、年数を経ても耐えられるという視点で検証方法を考えていくべき。
- 抽出や再点検も、どのタイミングでどのくらいできるのかということもある。合否発表後に、間違いだったとなることが一番問題である。
- 教育委員会でやる以前に、各学校でも任意抽出でもよいので点検することも必要ではないか。

第4回 県立高等学校入学者選抜調査改善委員会 議事要旨

- 1 日 時 平成28年5月9日(月) 10:00~12:00
- 2 場 所 神奈川県庁 新庁舎5階 第5会議室
- 3 議 事 等 (1) 「中間とりまとめ」の検討について
- 4 出 席 者 田中 統治 委員長 林 巧樹 委員 遊部 裕司 氏
松本 一彦 委員 佐藤 均 委員 稲田 義郎 委員
九石美智穂 委員 土佐 明美 委員 折笠 初雄 委員

(遊部氏は、笹原委員代理)

5 発言要旨

(1) これまでの調査結果から考えられる誤りの原因分析

- 「学力検査日から合格発表までの期間が中8日あり、1日追加できるようにしていた。」と、全体としてはこのような記述になるが、特色検査を行う学校は6教科で検査日も1日程度多いので、その現状について記載する必要がある。
- 特色検査を行う学校では6教科にわたる採点・点検業務があることの表記が必要。
- 採点を解答欄の余白に行うこと自体が原因の一つであり、誤りが起こりやすいやり方も改善すべきである。
- 採点の欄をどういうイメージにするかは検討が必要であるが、点検欄はあったほうがよい。
- 「採点基準に基づく取扱いについて徹底、共有できなかった」とあるが、採点基準はどの学校でも徹底、共有はできている。誤りの内容や誤りの多い箇所の共有化、注意喚起という表現にしてはどうか。
- 「特に、合否の判定の分岐点に関わる採点・点検訂正を充実させ」とあるが、全ての受検者に誤りがあってはならないので、合否に関わりそうな部分だけの再点検を強調するのはどうなのか。分岐点に関わる部分だけを特に注意すればいいのかというメッセージになってしまうのではないか。
- 全部再点検するのは当然だが、合否がひっくりかえる恐れがあるところは最低限なくすという意味で、記載はあった方がよい。
- 採点・点検体制を充実させるという表現は、「より一層強化」というような表現にしたらどうか。
- 入学者選抜だけでなく、学校の教育活動や生徒に係ることは全て校長の責務のもとで行っていることは明白であるため、「責任の所在を明確にしておく必要がある。」という一文は削除してはどうか。

- 校長先生に全ての責任があるのは当然かもしれないが、誤りを起こした先生を含め、責任は各々にあることを明確にしないと、責任の所在があやふやのままになってしまうので記述は残すべき。
- 責任は、校長だけがとればよいという問題ではなく、採点にかかわった教員全員に注意喚起をしていくことが大切である。
- 採点に関わる先生方が1回の休憩でどの程度休憩時間を取っているかの記載が無いので入れた方がよいのではないか。

(2) 現時点で考えられる再発防止・改善策の方向性について

- 1、2年生の授業時間の確保の点から考えて、学力検査、面接に加えて、さらに2日休校することが現実的に全ての学校で可能か。
- どの校長も苦渋の選択をして、採点の時間と在校生の授業時間を確保している。事故は出せないという観点から考えると、休校日について許容範囲を設けていくことが、事故を防ぐことに繋がるのではないか。
- 採点日をもう1日設定するかどうかを学校判断にするのは基本的にやめ、教育委員会で決めて、採点日数は丸2日かけるということにした方が誤りが少なくなるのではないか。
- 今年は19日（金）に採点・点検をした学校が多く、22日（月）にさらに採点と点検を行うことは、学校判断に委ねられていたのが実態だったのかもしれないので、括弧ではなくて、必ず業務としてやるよう位置付けを明確にしてはどうか。
- 「マークシートの一部導入」の一部が何を指すのかわかりにくいので、「マークシートの導入」がよいのではないか。
- 一部を消すと、記述式がある中で、神奈川県の高校入学者選抜は全部マークシートになるという意味にとれて、誤解を与えるのではないか。
- 記号選択式問題の解答にマークシート方式導入とし、記述式問題については、現行どおり実施することを付け加えた方がよい。
- 中学生がマークシートに対応可能ということでよいと思うが、視力等に課題がある等の生徒がいた場合の配慮について、最終とりまとめに記載が必要。
- マークシート導入の際には、中学生への指導や注意喚起について手だてが必要だと思うので、丁寧に検討願いたい。
- 記述問題により思考力、判断力、表現力を図ることは、高大接続の面やこれから測るべき学力の面からも必要である。
- 「問題の配点が複雑にならないような工夫」という部分であるが、記号式の問題は、マークシートを導入するならば、どんなに複雑でも機械が間違いなく採点するので、手採点かマークシートの採点かで意味合いが変わる。
- 「記述問題について、より採点しやすい問題」に関しては、教科によって大分意味合いが変わるのではないか。
- 「教科の特性に配慮しながら」という一文を入れてはどうか。
- 教科外の先生が採点・点検ができるような作問にしたほうがよい。
- 記述を行うことは、入学者選抜でも重視すべきだと思うが、できるだけ採

点の誤りが生じない作問、出題形式、採点・点検方式の研究を続けるべき。

- 資料8の記述式問題の採点誤りの状況を基に、有効な防止策を考える必要がある。
- どのような記述式問題が良い問題であるかの検討を重ねてほしい。誤字の採点で誤りを防ぐためには、一律にマイナス1点という方式でもよいのではないか。
- 理科では1点減点になっているが、社会では2点減点になっており、教科による軽重があるので、できるだけ統一したほうがよいのではないか。
- 問題の検証はあまり行われていないところがあるので、少し問題の研究もどこかで行っていくとよい。
- 校長会において、中学校現場の先生方への意見集約は行っている。問題が学習指導要領に則っているか、教科間の難度等、全学校の教科担当から吸い上げ、県教育委員会に報告しているが、採点の細かい内容までは入っていない。
- 県教育委員会も、中学校からの意見を最大限尊重して工夫している。
- 学校間で交換して再点検という部分については、方法としては考えられるが、採点から発表までの日数からすると現実的ではない。
- 答案を持ち出すのは難しいと思うが、先生が他校に行って採点・点検を行う方法もある。
- 自校の採点をするので精一杯であり、学校間点検は時間的に難しい。
- 専門高校は、学力検査の5教科の先生が3、4人という学校もあり、2系統で記述式問題について採点を突き合わせる方法への対応は学校によっては難しい。マニュアルでどの程度まで縛りかけるのかは、現実的なことを考慮して検討いただきたい。
- 専門高校のように主要教科の先生が少ない高校に、教育センターの指導主事が応援に行くということは、考え方としてはありえるか。
- 開校直後の学校等には、教育委員会や総合教育センターの指導主事等々が採点の手伝いに行くことはこれまでもやっている。今後の方向性の中で、そういった考えで行うべきということであれば、方法論の一つとして受け取り、検討していく余地がある。
- 採点者により強い意識を持っていただくことも大事なことで、そのあたりの言葉をどこかに入れていくことも重要である。
- 全体に対して、この委員会として、自覚をさらに強く持って臨んでいただきたいという要望を付記する。

(3) 現時点で考えられる入学者選抜実施後の検証方法等について

- 答案の開示請求について、募集案内に予め表記するなど、応募する段階から選べるシステムにしてはどうか。
- 「県教育委員会事務局における、抽出における再点検の検討」とあるが、検証の組織のようなものを設け、継続的にマネジメント続けていく必要があるのではないか。

